

寺山修司の演劇

「職業」寺山修司

寺山修司は、その経歴（付記参照）を見れば分かるように、目が眩むほど多才な人物である。歌人であり、俳人であり、競馬評論、スポーツ評論もやれば、写真や映画も撮る。然るに、ここでは演劇人としての寺山に焦点を当て、彼の残した演劇論や演劇実験室「天井桟敷」の公演記録を手がかりに、その思想の一端に触れてみたい。

寺山が活躍した時代は大戦後の実存主義的な空気が席卷し、世界中の至る所で演劇の新しいスタイルが模索されていた。日本においても、明治維新以降、舞台芸術の中心に座を占めてきた新劇に対して、アンダーグラウンドという全く異質の表現形態が生み落とされた。ところが、寺山は次の一点において、同時代の演劇人とは明確な一線を画することになる。すなわち、彼は、戯曲の形式／演技手法／舞台デザインなど、芝居の構成要素の変革に留まらず、演劇の制度そのものを問い直したのである。

日常と虚構

日常と虚構の間に横たわる境界線の破壊、これが、寺山の多角的戦略の通奏低音である。彼は、日常と虚構を隔てる因習の装置として、従来の演劇の二つの側面に着目する。すなわち、

- ・ 観客(観る者)と俳優(観られる者)という機能区分、
- ・ 劇場の内と外という空間区分、

である。

プロセニアムの破壊：その1

『邪宗門』（1971年、アムステルダム メクリシアター他）

密室化された劇場。舞台装置を自由に組み立て、照明を支配し、自らの望むかたちで劇を進行させようとする、ひとつの「権力」としての黒衣の集団。一方、その操作から抜け出して、強制された「役柄」から自由になるようとする俳優達。舞台はこの二つの集団の間の葛藤として展開する。

「黒衣」は常に場内を見廻り、無理やり観客に役を与えたりする。また、黒衣の意に反する流れを作り出そうとした観客を、力によって服従させる。

< 公開討論会 批評家ヴィーゲンシュタイン氏への暴力行為をめぐって

...劇の「内」か「外」か？>

「もし暴力事件が劇の中の出来事であるとしたら、劇の中の警官がそれを取り締まるべきだ。」

「問題は、あなた(=ヴィーゲンシュタイン)の考える劇のフレームが、私のそれと同じであったかどうか」

プロセニアムの破壊：その2

『阿片戦争』（1972年、アムステルダム メクリシアター）

劇場内は迷宮のように仕切られている。観客は其中で登場人物を探しながら、いくつかの部屋で個別的な体験(=イベント)をする。たとえば、ある部屋では、観客は椅子に縛り付けられ、目隠しをされたまま、全身に油を塗った男に写真を撮られ、素足を洗われる。またある部屋では、観客十数人で食卓を囲み、配膳されたスープを飲み干す。スープには睡眠薬が入っており、観客は終演

までその場に眠らされる。だが、こうした虚構との出会いをもつことができた者はまだ幸いであり、最後まで完全な密室に閉じこめられて、音と気配でしか「劇」とかかわることのできなかつた観客もいる。

地下室で、二階で、天井裏で、物置で同時多発的に起こるイベント。劇中における個々人の体験は全く個別的で、一人が全体を見渡すことはできない。それぞれの断片的なイメージを重ね合わせることで不在の物語を紡ぎ出す、いわば集団妄想の劇である。

劇場の壁の破壊：その1

『人力飛行機ソロモン』（1970年、東京都高田馬場・新宿）

観客には入場券ではなく地図を売る。地図には新宿から高田馬場までの間で、同時多発的に発生する劇の場所が記されている。地図を買った観客は、そのマークを手がかりに劇を探して町をさまよう。区内16カ所において、1メートル四方1時間国家の誕生。

ただ「走り抜ける」ことだけを要求された役者が、正午の時報と共に走り出す。首には「誰か私に話しかけて下さい」と書かれた札。100人に同じ質問をし、質問された人に更に100人に質問させる「質問結社」の人々。団地家屋を戸別訪問するポパイ。公衆便所で壁越しに隣の排泄者へ語りかける単独者。繰り返し紙ヒコーキを飛ばしては、落下地点に自分の名前を記し続ける少年。彼を姦そうと目論む男色家の明智小五郎…。

「現実らしく見えるが、もしかしたら仕組まれている虚構」と「虚構のように見えるが、実は無作為の現実」のあいだを、観客は揺れ動く。「街路劇」ではない「市街劇」。見せ物として日常の補完物に成り下がることを、頑なに拒み続ける。

*市街劇第2弾『ノック』では、市民の通報により警察が介入した。

劇場の壁の破壊：その2

『書簡演劇』（1975年、東京都杉並区一帯）

劇はいくつかの形態に分類される。たとえば、

- ・一般家庭に宛てられ、家の中、家族どうしによって「上演」されるように台詞を指示した手紙、
- ・中年の独身生活者のもとへ、毎日、同じ時刻に配達される「もう一人の彼自身」からの手紙、
- ・最初に一週間後の自分の訪問を予告し、毎日1行づつ自己紹介してゆく手紙、
- ・「遺失物の預かり」を通達し、返還の日時と場所を指定して、何人かの見知らぬ者どうしが出会うように仕向ける手紙、など。

「オウム事件」と寺山修司

「オウム事件」が通常の犯罪と異なる点は、犠牲者の無差別性というその性格にある。テロリズムとはそもそもそういうものであるが、政治テロの場合には、少なくともある程度のターゲット（官公庁、大手企業など）が定められている。しかし、「オウム」にとっては社会秩序自体が標的である。日本の安全神話を破壊することで社会を人心不安に陥れ、人々の終末感を煽ろうというのだ。ゆえに、共同体を構成する我々の誰しもが、いついかなる時でも犠牲者となりうる。社会そのものが、犯罪の舞台へと組み換えられたのだ。

銀行強盗は銀行に勤めていない人にとっては、「あちらの世界」の出来事である。人質をとって銀行内にたてこもる犯人の行動を、われわれはテレビなどを通して、茶でもすすりながら観察する。それは、決して「害」が及ぶことのない観客席で、芝居の殺人現場を眺める観客の態度である。ところが、オウム事件はどうであろうか。もはや誰もが、明日の新聞に自分の名前が犠牲者として載る可能性を持って

いるのだ。われわれは地下鉄に乗る。真っ先に網棚をチェックする。周りに怪しい人間がいないかどうか、ぐるりと見回す。何の変哲もないカバンが恐ろしい凶器に、人の良さそうな青年が殺人鬼に見えてくる。オウム事件は、地下鉄という日常風景を、テロリズムの舞台へと異化してしまったのである。

そして、寺山が仕掛ける演劇の暴力性を支えているのも、この無差別性および匿名性である。誰が加害者で、誰が被害者となるか分からない状態、いつ自分にお鉢が回ってくるか分からないという宙吊り構造が、日常／虚構の図地関係を慌ただしく反転させるのである。つまり、寺山修司とは、我々の現実原則に間断なく揺さぶりをかけてくる「事件」そのものなのである。

(1997年9月18日 脱稿)

付記：寺山修司の軌跡 (ホームページ「SMASH IT UP」から要約 <http://www.asahi-net.or.jp/~cw5t-stu/index.html>)

1935年(昭和10年)

青森県弘前市生まれ。

1954年(昭和29年)18歳

早稲田大学教育学部国文学科に入学、上京。『チエホフ祭』50首で第二回『短歌研究』新人賞を受賞。

俳壇、歌壇にセンセ・ショナルなデビューを果たすが、ただちに猛烈な批判をあびる。

1955年(昭和30年)19歳

詩劇グル・ブ『ガラスの髭』を組織し、早稲田大学祭の旗揚げ公演に戯曲第一作『失われた領分』を書く。

ネフローゼで新宿の社会保険中央病院へ入院

1956年(昭和31年)20歳

大学を中退。絶対安静がつづく。

1957年(昭和32年)21歳

第一作品集『われに5月を』(作品社)、エッセイ集『はだしの恋歌』(的場書房)を刊行。

1958年(昭和33年)22歳

病院と新宿歌舞伎町を往復生活。賭博とボクシングに熱中する。『空には本』(的場書房)を刊行。

ノミ屋の電話番、ディ・ラ・などの仕事をする。

1959年(昭和34年)23歳

谷川俊太郎のすすめで書いたラジオドラマ『中村一郎』が民放祭大賞を受賞。堂本正樹らと集団『鳥』を組織。

処女シナリオ『19歳のブル・ス』を執筆。

1960年(昭和35年)24歳

三幕劇『血は立ったまま眠っている』が劇団四季によって上演される。

『乾いた湖』篠田正浩監督作品。寺山の脚本で九条映子出演。

1961年(昭和36年)25歳

ボクシング評論を開始。ファイティング原田に出会う。文学座アトリエにて『白夜』を上演

土方巽、黛敏郎ら6人とアバンギャルドの会で『猿飼育法』を上演。

1963年(昭和38年)27歳

九条映子と結婚。

大学にて『家出のすすめ』を講演、『現代青春論』としてまとめ、刊行(三一新書)。

1964年(昭和39年)28歳

塚本邦雄、岡井隆らと「青年歌人」を組織。

放送詩劇『山姥』がイタリア賞グランプリを受賞。

1965年(昭和40年)29歳

6月、戯曲集『血はたったまま眠っている』(思潮社)刊行。8月、第三歌集『田園に死す』(白玉書房)刊行。

1966年(昭和41年)30歳

1月、最初のスポ・ツ評論集『みんな怒らせる』を刊行。『競馬場で会おう』(華書房)。

1967年(昭和42年)31歳

横尾忠則、東由多加らと演劇実験室「天井桟敷」を設立。第一回公演として『青森県のせむし男』を上演。

3月、『書を捨てよ、町にでよう』(芳賀書店)を刊行。

1969年(昭和44年)33歳

渋谷に天井桟敷館及び地下小劇場落成。ドイツ演劇アカデミーの招待により国際演劇祭EXPERIMENTに参加、『毛皮のマリー』、『犬神』を上演する。唐十郎率いる状況劇場との乱闘事件で留置される。九条映子と離婚。

1970年(昭和45年)34歳

16ミリ実験映画『トマトケチャップ皇帝』。第12回公演『市街劇・人力飛行機ソロモン』を新宿一帯で上演。

1971年(昭和46年)35歳

長編映画第一作『書を捨てよ町へ出よう』を監督。

ナンシー国際演劇祭の招待で、『邪宗門』と『人力飛行機ソロモン』を上演。アムステルダムで『邪宗門』を上演。

1972年(昭和47年)36歳

3月、『家出のすすめ』を刊行。オランダ・メクリシアターで密室劇『阿片戦争』を公演。

1973年(昭和48年)37歳

ポーランド国際演劇祭の招きにより『盲人書簡』を上演。

1975年(昭和50年)39歳

杉並区で30時間市街劇『ノック』公演、警察が介入、新聞の社会面をにぎわす。

1976年(昭和50年)40歳

6月、評論『迷路と死海』、8月、評論『鉛筆のドラキュラ』を刊行。『呵呆船』を東京とイランで上演。

渋谷天井棧敷館閉館、麻布十番天井棧敷館開館。

1978年(昭和53年)42歳

オランダ、ベルギー、西ドイツ、東京の各都市で『奴碑訓』を上演。オムニバス映画の一編『草迷宮』を脚本監督。

1979年(昭和54年)43歳

10月、評論『青少年のための自殺学入門』を刊行。肝硬変のため北里大学付属病院に一月入院。

1980年(昭和55年)44歳

レアージュの『嫌の物語』をもとに脚本を書き、『上海異人娼館(チャイナ・ドール)』と題して監督。

1982年(昭和57年)46歳

最後の海外公演『奴婢訓』パリ公演。12月、『レミング - 壁抜け男』公演を最後の演出と決意。

1983年(昭和58年)47歳

『墓場まで何マイル?』を執筆。5月27日、意識不明となって東京杉並の河北総合病院にかつぎこまれる。

5月4日、肝硬変と腹膜炎のため敗血症を併発、同病院にて死去。